

『偉人崇拜の民俗学』

伊藤 龍平

たぶん偶然の要素はあるものの、いくつかの条件があった。

著者も述べているように、研究史上、「偉人」研究に先鞭をつけたのは、柳田國男の「人を神に祀る風習」（一九二六年）だった（ただし、「偉人」を前面に出しているわけではない）。柳田は人神信仰を二段階に分けている。「ローカルな人格崇敬」と、その「ナショナルなレベルへの拡張」

フィールドワークをしていて、こういう経験をすることはないだろうか。朗々と確信に満ちた口調で、誇り高く、郷土の歴史を語りあげる話者。その語り口は、あたかも史書を読むかのように淀みない。話者たちの多くは壮年以上の男性である。そこで紡がれる歴史には、類まれなる郷土の「偉人」の事績が讀えられる。他者であるフィールドワーカーが、異論を挟めないような空気。一方で、話者は、史実が確認できない伝説上の英雄の事績は、荒唐無稽だと一笑に付す。

このような、伝説とは明らかに肌合いが異なる歴史語りの特徴は、中央の大きな物語（国史）と結びついて存立している点にある。伝説も文芸を通じて大きな歴史と結びつくことはあるが、基本的には、閉鎖的な共同体のなかで完結している。地域の誇りである「偉人」と、伝説上の英雄の共通点、相違点はどこにあるのか。

本書を読みながらそんなことを考えていた。以下、口承文芸研究に引きつけつつ、内容を検討する。「」内は著者の言葉の引用。

そもそも「偉人」とは何者だろうか。個人レベルで記憶される死者がいる。個人のレベルを超えて記憶される死者もいる。彼らと「偉人」とは何が違うのだろうか。著者は「偉人」を次のように定義している――

また、御霊の枠に収まりきらない、近代戦争の死者たちも研究の射程に入れられるようになった。戦没者祭祀と、そのなかでも特殊な位置にある英霊祭祀の問題である。この点について、著者は、民俗学の方法に加えて、歴史学で用いられる記憶論の方法が有効であると説く。

「一定の価値基準に基きつつ、そのパターンリティにすぐれたる何かを読み込み、当該人物が群を抜いた人物であると記憶化／想定された結果発生する人物表象の形式」。

先行研究を丁寧参照したのち、著者は、

ある人物が、死後、「偉人」化するには、

先行研究を丁寧参照したのち、著者は、

ある人物が、死後、「偉人」化するには、

先行研究を丁寧参照したのち、著者は、

「記憶過程」において、「記憶化」と「想起」の双方が重要であると説く。その際、「記憶化」が静態的なものを目指すわけではないこと、「想起」された記憶が単一的であっても、それが「事実」ではないということが、注意深く言及される。

本書では、人神研究と記憶研究を縦糸横糸にして、論が編まれていく。

最初に、全体の構成を紹介する。序章は「研究史の整理と本書の方法」。第一部「近代日本の神格化と偉人化をめぐる世相」では、特定の条件を有した死者が「偉人」として立ち上がっていく過程が、近代の顕彰・贈位という制度を軸に追われる。第二部「神格化と偉人化の実態」では、地域と「偉人」の結びつきの様相が発生的に把握される。第三部「現代社会における神と偉人」では、近代に育まれた「偉人」たちの、現代における展開が紹介される。終章「本書のまとめと今後の課題——民俗学的歴史認識論に向けて」では、「偉人」を対象化できなかったことが、従来の民俗学の問題点だったと述べられる。

続いて、各章各節の内容を紹介しながら、検討する。

第一部第一章「顕彰神」論」では、近代に「顕彰神」化した楠正成を例に、「歴史の社会資源化」がテーマとされている。「顕彰神」は、小松和彦が提唱した概念である。民俗学における「人神」を「個性を忘却されない死者をめぐる表象の一形式」とする著者は、その「個性が忘却されない」理由に「非業の死」を挙げたうえで、楠正成がなぜ怨霊化しなかったのかという疑問を投げかけている。柳田の人神信仰論の盲点である。そして「顕彰神」が、近代的価値観によって評価される以前に、前近代から特別な存在と位置づけられていたことが指摘される。著者によると、「顕彰神」はそれ自体は近代的なものではなく、「日本」という「国民国家」の一体性を前提として、他国に対峙するために活用された、という一点に近代性があるという。「偉人」が近代に生じやすい理由が理解できるとともに、他国・他地域の「偉人」状況も気になってくる言葉である。

第一部第二章「偉人化される死者たち」では、近代に盛んだった贈位と「偉人」化の関連について論じられている。「死者たちの序列化」である贈位は、「現実世界における歴史の空間化や、人物の末裔およびその他諸々の人々による歴史をめぐる取り組みにも作用するもの」だった。同郷会や職業的関係性を有する団体が贈位に関与しているのがその証左になる。そして「特定の死者をその他の無数の死者とは区別して称揚する眼差し」が、近代において、(1)「ローカルな価値観」、(2)「ナショナルな価値観」、(3)「個々のローカルな場・集団を越えたレベルで共有される価値観」が交錯して存在していた点に言及されている。とりわけ、三点目が重要であろう。民俗学において近代を扱う場合、ローカルとナショナルの二元論を採りがちであるが、その点のみに拘泥すると謬見に陥る。ただ、贈位という制度を成り立たせていた近代天皇制への言及が少ないのは若干気にかかる。

第二部第一章「郷土の偉人の変容」では、「戦国武将の観光資源化」について、山梨

県における武田信玄を例に論じられている。国民国家が創られていった近代、当局は偉人崇拜を否定するのではなく、尊重する姿勢を打ち出した。この事実を、著者は「ナショナルな価値観が、歴史上の人物をめぐるローカルな価値観に作用する局面の一つとしてきわめて興味深い」とする。また、近世と近代で、武田信玄の祭祀に相違が見られるという。近世においては、信玄を崇拜したのは、武田家と何らかの関係がある人々の集団、つまり「信玄との「関係性」が権威たり得るような社会状況の中で、これらの人々の活動があった」わけで、いわば私的なものだった。それに対して、近代の信玄崇拜は公的なものだった。「ローカルなもの」は常にローカルのものとの関係において、「ローカライズされる」という指摘は、地域を軸にした伝承文学を研究する者には得心がいくものである。

第二部第二章「偉人の発見」でも、地域と「偉人」の関係性が、神奈川県茅ヶ崎市の大岡忠相を例に説かれている。当該地域の出身でも善政を敷いたわけでもない大岡

が、墓所があるという理由で、近代以降「郷土の偉人」として「発見」され、「創造」されていった経緯が追われている。ここでも、贈位と祭礼がおこなわれていた。その際のキーワードが「勤皇」だったのは、近代的な特色といえる。講談などのフィクションのなかでの名奉行としての大岡像も「偉人」化に影響した。著者が指摘するように、「大岡政談」がフィクションであるのは一般にも知られているが、そのことは名奉行・大岡忠相のイメージを損なうものではなかった。大岡の虚像は、むしろ民政に尽力した人物だったという史実を補完するものとして扱われ、認知されているのである。規範批評的な物言いは控えなければならぬが、この点は、伝説上の人物と史実の彼らをめぐる研究史が参照されてもよかつたかもしれない。

第二部第三章「伝説にみる偉人の神秘化と権威」では、前近代的な偉人表象の例として、武田信玄と徳川家康の例が挙げられている。まず、柳田の伝説研究において、人名などの固有名詞が「地域史的なりアリ

テイに即した合理化」と捉えられていたことが批判される。そして「伝説が定型をもたない過去についての説明的な語りであるとするならば、伝説と縁起・由緒との関係は古典的な主題」であったことが述べられたい。本章の目的が「伝説論・由緒論にはな」く、「前近代的形式における偉人想起の一樣態を明らかにすること」にあると述べられている。著者の意図するところからは逸れるかもしれないが、「西洋的な記念碑文化に先行して「樹木」による記憶の文化が日本にもあった」という指摘や、偉人化と神格化の近縁性を「世俗的存在と宗教的存在をめぐる眼差しの分かち難さ」から説明している箇所は、伝説研究者にとっても益するところ大である。

第三部第一章「神・偉人の観光資源化と祭礼・イベント」では、観光と民俗（学）の関連について論じられている。ここでも取り上げられているのは武田信玄だが、「偉人」をめくっておこなわれる「記憶の共同化（共記憶化）」に伴う集団の統合への関心」や「死者の社会資源化」「政治資源

化」などの指摘は普遍的なテーマである。

著者は、イベントが過去の再現であること、そこで再現された過去が必ずしも史実ではないことを指摘したうえで、「世俗的な目的のもとで宗教施設と関連なく行なわれるような神不在の「イベント」であつても、そこで表象化される歴史上の人物には神であるかのような表象化、あるいは疑似的、一時的な神格化とも呼ぶべき現象が生じている点」に言及している。いささか気になるのは、「世俗」と「宗教」が対置されているように読める点である。「世俗」の中にこそ「宗教」があると思ふのだが、いかがだろうか。

第三部第二章「教育資源としての神・偉人」では、近代における「偉人」の「歴史資源化の様態」に「教育資源化」があることが述べられている。例として挙げられるのは、赤穂義士である。戦前と戦後で義士に対する評価は一変したが、奇妙なことに、教育資源として用いられる点は同じだった。戦前は軍国主義教育のもとで、戦後は郷土教育のもとで、義士は義士たりえ

たのである。著者は「義士祭を観客や担い手として体験する主体のレベルで見た時、対外的アイデンティティのために提示される表象は、その他の表象とともに、コミュニティ内の成員がコミュニティの歴史をアイデンティファイしていくための手掛かりとしても活用される」と述べている。祭礼・イベントのもつ意味の多層性がわかるだけでなく、「偉人」が何のため・誰のためかという点についても考えさせられる一節である。ただ、義士の「義」とは何かという点は、もつと掘り下げてもよかつたと思う。

第三部第三章「歴史上の人物をめぐる想起と語り」では、マスメディアを介した歴史体験とジェンダーの関係について論じられていて、個人的にはもつとも興味深く読めた。最近、ブームとされる「歴女」についてふれられたあと、歴史上の人物のほとんどが男性であることが、男女の歴史への感情移入の差異となつてることが述べられる。つまり「偉人」化された歴史上の人物の多くは、男性にとつては理想的な同性

に、女性にとつては理想的な異性になる。結果、男性は「偉人」の業績に自己の人生を投影させて教訓を導き出すが、自己の人生を投影できない女性は「偉人」の人となりや暮らしぶりのほうに共感する。「今日の人々が参照可能な歴史知識があらかじめジェンダー化されたものである」という指摘は重く受け止めなければならない。伝説でも、男性が主人公の場合と女性が主人公の場合、男性が話者の場合と女性が話者の場合など、性差の問題は発生する。

第三部第四章「子孫であるということ」では、武田家の家臣の末裔であること、今日の意味について論じられていて、本書中の白眉といえる一編である。著者がいうように、一般に「周囲から期待される人物像を内面化し、そのようにふるまうことは、円滑なコミュニケーションを図ろうとする主体においても生じ得る」ものだが、くわえて歴史上の人物の子孫の場合、「歴史を使用した自己表現」がなされる。しかし、それが専門的知識や歴史をめぐる通念によって否定されたとき、人はどのように

自己を語るのか。著者は「自己表象に歴史が使用される様態」を捉えるのに民俗学が有効であると述べている。また、「過去を公共化することで為される集団形成」が、「当事者にあらざる主体に間接的な当事者性」を生むという指摘も興味深い。そのうえで、他者が「過去を公共化」し、「ドミナントな物語に回収されない人々の発話や生き方、歴史的自己像を否定する行為」の暴力性についても警鐘を鳴らしている。

終章において、著者は、今後の課題を二点挙げています。一点目は「人物表象における「偉人化」への歴史的・比較文化的アプローチ」、二点目は「身近で平凡な死者の想起」である。前者は学際的な広がりを持つテーマであり、海外の研究者との共同研究にしても面白い。後者は民俗学の祖先祭祀研究に一石を投ずる内容になる。続稿が楽しみです。

最後に、本書を読んで気になったことを三点挙げる。

一点目は、「偉人」化の過程で、当該人物の負の面がどのように処理されているか

という点についての言及が少ないことである。ある人物を「偉人」化することには、エピソードを取捨選択し、実績の評価にバイアスを加え、多面的であるはずの人格を一面化・一元化することである。その過程で、何がおこなわれるのか。

二点目は、歴史や地域と結びつかない「偉人」への言及がないことである。本書には、地域の歴史のなかで、特定の死者が「偉人」として立ち上がっていく過程が鮮やかに描かれている。しかし、実際には、そうではないケースも多い。例えば、海外の人物の偉人伝が日本で流通しているのは、どのようなメカニズムによるのか。地域や歴史を離れた「偉人」は、何のために、誰のために語られるのか。子ども向けの偉人伝などに顕著だが、「偉人」とは、他者が評価して、すでにそこにあつたものとして現れることが多いのである。

三点目は、本書のテーマを敷衍させて、著者が提起した「歴史の複数性」の問題を、本文冒頭で述べた、伝説と国史の關係に卜レースさせられるのではないかということ

である。「歴史」は必ず「誰か」あるいは「どこか」や「なにか」の現在を説明づける物語たり得るのであり、誰にとつても重要な均質な「歴史」などというものはない」とする著者の「偉人」論は、「過去の公共化は、歴史の一元化／「歴史」への一元化ではない。また、個人の歴史観から切断することで公共財化することでもない」のが前提となる。この提言を伝説上の英雄に置き換えたとき、新たな地平が見えてくるように思われるのである。

以上、『口承文芸研究』という雑誌の性質を考え、当該分野に引きつけて評した。評者の非才により、見当はずれな指摘もあつたかもしれないが、ご容赦いただきたい。

二〇一七年二月 勉誠出版 本体六二〇〇円
(いとう・りょうへい／南台科技大学)